

	<p style="text-align: center;">オピニオン 進化からシニアを考える(5/9) SCE・Net 中安 一雄</p>	<p style="text-align: center;">O-43 発行日： 2026年3月18日</p>
---	---	---

本稿は「進化からシニアを考える(4/9)」に続くものです。

6)-7 「分からないまま」「ありのまま」という生き方 (あいまいさを残す)

「人を超えた存在」のように、分からないものをあいまいなまま受け入れることは、日本人の知恵である。

現代は合理主義の時代で、物事を理屈で説明し解明しようとする。しかし、合理主義はすべてを説明できるわけではない。人間の理解を超え、理屈では捉えきれないものも存在する。そうしたものに対して、日本人は無理に説明を加えたり、こじつけたりせず、「分からないものは、分からないまま受け入れる」という態度を取って来た。「あいまいさ」を残したのである。

「分からないまま」という発想はおもしろい考え方である。「分かった」と思えばそこで思考は止まる。「分からない」としてしまうと、「考えても無駄」だからということではやはり考えが止まる。それに対して「分からないまま」は「分からないからこそ」考えようという姿勢である。分かろうとして考えるのだが、考えると同時に「分からない」のだから、「考えたことは違っているかもしれない」ということを忘れないのである。「分った」はうぬぼれ、「分からない」はあきらめとするなら、「分からないまま」は謙虚さである。

「ありのまま」という言葉にも同じような意味がある。「ありのまま」とは現状を肯定することである。が、それは「何も変えない」という意味ではない。現状を受け入れることで得られる安心感や自信を土台にして、より良い方向へ進もうとする姿勢である。

「人を超えた存在」－神－や神が考えることについても、「分からない」と認識しつつ、「では、『人を超えた存在』であれば、どのように考えるだろうか」と考え続ける。と同時に「考えたことはあくまで推測であり、間違っているかもしれない」という自省を忘れない。この姿勢があるからこそ、正解を求めて思考を深め、思索や対話を続けることができる。いつもあいまいさが残るといふより、むしろ積極的に残すのである。もし「これが正解だ」と思い込めば、真の正解を見逃すかもしれない。天動説がその典型である。「間違っているかもしれない」という疑問を持ったから、人は地動説にたどり着いた。科学は疑問を持ち続けるからこそ発展を続けることができるのである。

『錯覚の科学』(C・チャブリス他、文春文庫、2014。菊地聡、放送大学教材、2020)によれば、人は日常のいろいろな場面でさまざまな錯覚を起こしている。錯覚は視覚だけでなく、思考や記憶、因果関係の推定においても生じている。人は入って来る膨大

な情報の処理を効率化し、直感的に物事を判断するようになった。その結果、正確な認識が犠牲になり、誤った理解をするようになったのである。しかも、その誤りに気づかず、正しいと思い込み、疑問を持たない。それが錯覚である。たとえば、エアコンを買い替えるとき、最初「20万円です」と言われ、次に「でも10万円値引きしますよ」と言われると、最初から「10万円です」と言われるより得をした気持になる。人間にはこのような錯覚する本性があるので、「事実は何か」を考えると、常に自分自身の「認識」を点検する姿勢が必要になる。「自分は分かっていない。錯覚しているかもしれない」といつも確認することが、正しく前に進むためには大切なのである。

分からないものは、神のような人を超えた存在に限らない。正しさ、善、真理、人生、個性、信念、因果関係、そして自分自身—これらの多くは本来、明快に理解できるものではない。それにもかかわらず、人はそれらを正しく理解し、分かったつもりになっていることが多い。錯覚や思い込みが起こっているのである。良いと思って行ったことが悪い結果になることはよくある。「自分のことは自分が一番よく分かっている」は本当だろうか。どこまで分かっているだろうか。覚や思い込みはないだろうか。

病気や災害、事故の原因も本当のところは分からない。「なぜ『わたし』が苦しまなければならないのか」という問いは切実で苦しい。答えが容易に見つからないからである。そのようなとき「分からないまま」という姿勢は威力を発揮する。東日本大震災で、人々は深い悲しみを抱えながらも、暴動を起こすことなく、粛々と復興へ向けて歩み出した。苦しみを抱えたまま、パニックを起こさず互いに支え合いながら前へ進む姿を、海外のメディアは感動と賞賛をもって伝えた。

新潟は地震の多い土地である。1828年のマグニチュード7.4の地震では大きな被害が出た。そのときに良寛が書いた地震見舞いの手紙が残っている（中野孝次、良寛心のうた、講談社α新書、2002、p124）。その一部を引用する。

うちつけに 死なば死なずて ながらえて かかるうきめを みるがほびしき
しかし、災難に逢時節には 災難に逢うがよく候 死ぬ時節には 死ぬがよく候
是ハこれ 災難をのがるる妙法にて候

かなり思い切った内容の手紙だが、良寛には災難を拒まず受け止めて生きる覚悟が日頃からできていたのであり、受け取る側にも良寛のところが分るだけの素養があったのである。この思いは今も東日本大震災にあった人々に引き継がれている。

将来のことを考え続けると人は不安になる。将来のことはよく分からず答えが出ないからである。しかし「分からないまま」「ありのまま」という生き方を知ると、不安は和らぎ、前へと進むことができる。

M&Aを考えてみる。そこそこのレベルの企業同士が更なる高みを目指して合併することがある。合併には社風の問題がある。合併では社員間に「なぜうちの会社が」とい

う疑問が出る。それぞれの社風があり、それぞれのプライドを持って仕事をしてきたのであるから、当然の疑問である。それを解消しないと一企業二社風となって M&A の効果が低減される。そのようなとき、「分からないまま」「ありのまま」の発想が役に立つ。それまでの社風を一旦受容する、その上で、両社の強みを活かし弱点を修正するにはどうすれば良いか、と考えるのである。こう考えることで M&A を新たな飛躍の出発点としてスタートさせることができる。一方、不祥事を起こした会社がそれを是正するために、優良会社と合併する場合を考えてみる。この場合に「分からないまま」「ありのまま」の発想をしてしまうと、古い体質を潜在的に残すことになり、時限爆弾を抱えることになるので失敗する。臨機応変が大切である。

「分からないまま」が機能していない例として、国会での議論が挙げられる。経済政策などは正解が一つとは限らないにもかかわらず、各自が自説を「正しい」と思い込み対立する。もし「本当の正解は分からないもの」という共通認識ができれば、「正解はどこにあるのか」と同じ方向を向いた議論ができるだろう。実施後も「本当に正しかったか」を検証し、迅速な修正が可能になる。政策は、一方的な提案ではなく、その時点での英知の結晶となるはずである。議論方法の進化が望まれる。

「分からないまま」という生き方には、「それは違っているかもしれない」という意識を持ち続ける謙虚さがある。それは考えることを止めずに、エンドレスに前に進む力になる。更にこれは、思考の暴走を防ぐ大切な役割を持つ。また後述する(9)-3~9)-5 参照) 個人主義や自由主義、合理主義が行き過ぎることを防ぐ知恵にもなる。

あいまいさを残す「ほどほど」という姿勢には、決断を避ける、論争が苦手といった側面もある。しかし、日本工芸に見られる職人技は、徹底的に技と知恵を磨き上げ、「とことん」完璧を目指す姿勢から生まれる。日本人は「ほどほど」と「とことん」を状況に応じて使い分けてきた。その絶妙なバランスが、日本人の知恵なのである。

6)-8 大切にしたい日本語

日本語は日本文化そのものであり、大切な言葉がたくさんある。以下にそのいくつかをあげる。これらの殆どは英語等には相当する単語がない日本独自の言葉である。

① いただきます (感謝のこころ)

日本人はだれでも食事の前に「いただきます」と感謝する。これは、もちろん食前の感謝である。しかし、これは食事ができることへの感謝だけではない。食材である「いのち」に対する感謝でもある。人は「いのち」を食事として摂らなければ生きていけない。自分のために犠牲になったいのちへの感謝も含まれる。しかし、それだけではない。食事を作ってくれた人、食材を作ってくれた人、食材を運んでくれた人、それらの過程で使う道具を作ってくれた人などへの感謝、さらに、いのちをはじめとする多くの恩恵に報いようという決意も含まれる。「いただきます」はそれらを一言

で表す優れた言葉である。

② ありがとう（感謝のころ）

毎日を無事に過ごせることは、本来、有り難いことである。有るものが無くなってみると誰でもそれを実感する。空気がなれば生きていけない。災害で水道が出なくなれば、とたんに日常生活に支障が出る。病気になれば健康の有難みが良くわかる。健康であることは有り難い。事故にあえば、無事であることが有り難い。ありがとうは、良いことをしていただいた時だけでなく、日常生活そのものや無事であることへの感謝の言葉でもある。

③ おかげさま（感謝のころ、謙虚なころ）

道で知り合いに会い、「いかがですか」「はい、おかげさまで」と挨拶をする。この挨拶の意味は、「わたしが今こうしてあるのは、皆様のおかげです」ということだ。「わたしの背後に、わたしを陰で支えてくれる『見えない力』や『他者』『おてんとうさま』がいる」、このことに気づき、「自分だけで生きているのではない、一人では生きてはいけないという感謝の気持ちを持つ」ことが、「おかげさま」という挨拶になるのである。言い替えると、自分だけの力で今の自分があるのではない、という謙虚なころである。

④ おたがいさま（助け合い許しあうころ、謙虚なころ）

「おたがいさま」は、「困ったときはお互い様」といった表現で使われる。「誰でも困るときがあるのだからお互い助け合おう」とか、「完璧な人間はいないから誰でもミスをする。自分もミスをする。ミスを許しあい再起を期待する」といった謙虚なころから生まれる言葉である。誰でも最善を尽くしても失敗することがあるものである。その時、お互い様だからということ許してもらえれば、難題に挑戦する勇気が出る。

⑤ お先にどうぞ（謙虚なころ、譲り合うころ）

自分の権利を主張するのが当たり前の中になった。しかし、自己の権利を相手に譲る、相手を立てる謙虚なころが「お先にどうぞ」なのである。

⑥ はたらく（人の役に立つ）

「はたらく」は「傍（ハタ）を楽にする」－これは語呂合わせだが、働くことの本質をついている。人の役に立つことは、生きることそのものである。利益を得ることが働く本質ではないことを日本人は知っていた。また、「楽にする」とは、楽になったことで感謝されることを考えると、「感謝されるレベルでものごとを行うこと」が働くことなのである。義務として行うだけでは働くうちに入らないのかもしれない。

⑦ 気配り（周囲を思いやるころ）

要求される前に必要性を察知して行動する、相手の立場に立った思いやりである。

⑧ お疲れさま（感謝のころ、いたわりのころ）

相手の労力を思いやり、感謝しいたわるころ。

⑨ もったいない（感謝のころ）

能力や機能を十分に発揮できていないときに、十分に発揮させたいと願うところ。自然やいのちに対する感謝のこころも含まれている。

⑩ まつりごと（相手に喜んでもらうために行う）

神さまだけでなく、日常生活に取り入れたい神事という生き方である(6)-10 参照)。

6)-9 足るを知る 無限に求め続けない

「足るを知る」は中国からきた言葉である。老子に知足者富（足るを知る者は富む）とあるが、仏教でもこの教えを説いている。この言葉は富むための要件だけでなく、もっと広く解釈されている。人の欲望は際限がなく、それを追求していても満足は得られない、満足を知ることがこころを富ませるということを教えている。5) で紹介したガーナマジックはその実例である。

良寛に次の句があるが、これも知足を言った句であろう。

焚くほどは 風がもてくる 落ち葉かな （良寛）

ものが豊かになり生活の利便性が向上した先進国では、新たなものを足すことより、やり過ぎをコントロールすることが大切になっている。欲望が限りなく広がり、インターネット等で AI に欲望を掻き立てられて、成長信仰が主流となっている現代だからこそ、知足ということが切実になっている。

6)-10 神事という生き方

日本の国技に相撲がある。相撲は単なるスポーツではない。神事として行われるものである。横綱には強さだけでなく、美と品格が求められる。神事には感性・知性・霊性の調和したものが必要である。神事は神さまを敬い、神さまに喜んでいただくもの、祈りである。それは神さまのこころを実践することであり、最善を尽くすことである。和を貴ぶことを始め、日本人の特長はものごとを神事と考えることから生まれる。日本独特のものに「なにになに道」がある。武道、茶道、歌道、華道、書道、芸道などである。これらにも神事の精神が入っている。

現代は競争社会で勝ち負けが重要視される。その社会の中で、神事という考え方を生かせないものだろうか。勝つためや欲望の追求ではなく、関係者の幸福のために最善を尽くすのである。出来栄えに美と品格を求める。人が生きる方向は、いのち、幸福に向かっていることを忘れてはならない。ものごとを知性だけで処理せず、感性と霊性を働かせるのである。勝ち負けでなく、Win-Win を求めるのである。「おてんとうさまは見ています」の精神や「人を超えた存在」の視点で考えながら生きるのである。政治は昔「まつりごと」と言われた。政治は神事なのである。政治だけでなく、すべてのことにこの観点を活かさないだろうか。

これができる、次のようなことができるようになる。勤勉、礼儀、惻隠の情、清潔、質素、親切、優しさ、協調性、他人を尊重、気配り、道徳心、秩序、従順、迷惑を避け

る、マナー、盗まない、謙虚、冷静、温和（争わない）、周囲に配慮、自己犠牲、名誉重視、恥文化、自然愛護、等々だ。表-3 にあげた日本人の良さは殆どがここから来ていることが分かる。

（つづく）